
ツォンカパの思想形成過程について

—中観・道次第・密教—

福田洋一
最終講義 (2021/2/24)

1

ツォンカパの根本的な思想

- ❖ 中観思想
 - ❖ 中観帰謬論証派による空性理解を仏教（顕教・密教全て）の根本とする
- ❖ 道次第（悟りへの道の階梯 Stages of the Path to the Enlightenment）
 - ❖ アティシヤ伝来の全仏教の体系化
 - ❖ カダム派の思想を踏襲する
- ❖ 密教思想（『秘密集会タントラ』の究竟次第の五次第）
 - ❖ 父タントラ（男性原理）の『秘密集会タントラ』の聖者流の理解による成仏の方法である究竟次第の五次第の体系化

2

思想形成過程の象徴的な型

聖文殊（文殊菩薩）の啓示による教え

伝統的な教説の聴聞

関連するインドの原典の精読



神秘的なヴィジョン（あるいは夢）を見る



文殊の啓示と伝統的教説とインドの原典の根本的な意味が
同一であるとの理解

3

ツォンカパの生涯の時間軸

- ❖ 1357年：青海のツォンカに誕生
- ❖ 1372年（16歳）：中央チベットに移って勉学を始める。
- ❖ 1390年（34歳）：ラマ・ウマバと出逢う。
- ❖ 1395年（39歳）：ドルンパの『教説次第大論』を読む。
- ❖ 1397年（41歳）：ブツダパーリタに加持される夢を見る。
- ❖ 1401年（45歳）：アティシヤに加持されるヴィジョンを見る。
：『菩提道次第大論』執筆。
- ❖ 1406年（50歳）：『善説心髓』『中論註・正理大海』執筆。
- ❖ 1409年（53歳）：ガンデン寺建立。
：マルパの思想を確信した夢を見る。
- ❖ 1411年（55歳）：『五次第を明らかにする灯明』を執筆。
- ❖ 1414年（58歳）：『秘密集会タントラ』註『灯作明』の複註を執筆。
- ❖ 1419年（63歳）：逝去。

4

聖文殊とラマ・ウマパ

- ❖ 1390年（34歳）の春に、文殊の声が聞こえるというラマ・ウマパと出逢う。この年の秋頃、ラマ・ウマパを仲介者として聖文殊の教えを聞く。
- ❖ 1392年（36歳）の秋に、ふたたびラマ・ウマパを介して聖文殊の教えを聞く。その間に、ラマ・ウマパを介さずに直接聖文殊と会話ができるようになる。
- ❖ その秋のうちに、東チベットに行くラマ・ウマパをラサまで見送りに行き、トゥルナン寺の仏殿で『秘密集会タントラ』の四灌頂をラマ・ウマパに授ける。
- ❖ その後、ツォンカパは、重要な活動に際して、あるいは学問上の疑問に出逢うたびに、常にラマ・ウマパと聖文殊を一体のものと観想して聖文殊にお伺いを立て、その指示を仰ぐ。

5

中観思想の形成過程

- ❖ 以下は拙著『ツォンカパ中観思想の研究』（大東出版社、2019）第2章「聖文殊の教誡に中観思想の形成過程」に基づく。
- ❖ 聖文殊に教えを乞い始めたとき、ツォンカパの関心の中心は、中観思想の疑問を問い質すことだった。
- ❖ ツォンカパは当初、世俗の存在（縁起する存在）は錯誤した意識に現れるのみで、勝義においては空であり全てのものの存在は否定され、いかなる肯定的な主張もなしえない、という考え方をしていたが、聖文殊はこれを否定して、空と同時に縁起の側面を重視しなければならないと説いた。
- ❖ 当初、聖文殊の教えを理解できずにいたが、聖文殊は、ラマと自分を一体のものとして祈願し、インドの原典を自ら精読するようにツォンカパを突き放す。
- ❖ このような聖文殊の指導は、ラマ・ウマパが東チベットに去る1392年まで行われる。

6

ブッダパーリタの夢

- ❖ その後、ツォンカパは弟子たちとお籠もり修行を行い、原典の精読に努めた。
- ❖ 1396年（40歳）の秋から1年間、ウルカのおデグンギェルの麓のラディンに滞在し、講義とお籠もり修行をしている間のある晩の夢に、5人のインドの中観派の論師が自性の有無などについて議論していた。その中から「私はブッダパーリタである」という濃紺の体をした巨体の学僧が『中論』の経帙をツォンカパの頭の上に載せて加持した。次の朝、その『中論』の箇所をブッダパーリタ註を見ると、何の苦労もなく、これまで疑問に思っていた中観思想の奥義を全て容易に理解できた。
- ❖ ここで得られた理解は、空と縁起が相互に不可欠のものとして、同一のものにおいて同時に成立するという思想であり、それを原典に基づき論理的に展開したのが、『菩提道次第大論』（1401年、45歳）の最後の三分の一を占める毘鉢舍那章である。

7

レンダワ宛ての書簡

- ❖ ツォンカパの8歳年長の師匠であるレンダワとは、ツォンカパ20歳から毎年のように会って相互に教え合い、また議論をしていた。
- ❖ ブッダパーリタの夢を見た後の1397年から1400年レンダワに会うまでの間に、聖文殊から教えられたことを細かく報告したレンダワ宛て書簡が数通残っている。
- ❖ ほとんどが聖文殊の言葉の引用のような形式で書かれ、興奮した熱気が伝わってくる。
- ❖ 内容は、正しい見解（縁起と空が一体であることへの理解）、輪廻を出離したい心、一切衆生を救うために仏道を実践すると誓う菩提心という、「道の三つの根本要素」と言われるもの。
- ❖ 密教についても別にレンダワ宛ての書簡が残されているが、それについては、まだ研究はされていない。

8

道次第

- ❖ 以下の道次第についての思想形成過程については、チベットからの留学生、更蔵切主の博士論文『「菩提道次第大論」におけるカダム派思想の研究—道次第を中心として—』の成果に基づく。
- ❖ 仏教に目覚め、輪廻の中で幸福な転生をしたいと願う小士、輪廻そのものから解脱しないと苦しみを逃れられないと知って出家した中士、自分一人だけではなく一切衆生が輪廻から解脱するために仏陀になることを求める大士という悟りへの道の諸段階を設定する思想。
- ❖ チベット仏教後伝期に来蔵したインドの高僧アティシャ（982～1054）が伝えた教えで、チベット仏教各宗派の基礎となる。
- ❖ その弟子ドムトウンからカダム派が始まり、その弟子ポトワ、その弟子シャラワと伝統が続く。
- ❖ その他、アティシャの何人かの弟子から、それぞれ別々の伝承がツォンカパまで続く。

『菩提道次第大論』

- ❖ 1401年（45歳）に執筆。ツォンカパの立宗宣言（長尾雅人）
- ❖ カダム派の道次第の伝統を集大成し、これ以降はこの書がチベットの道次第思想の基準となる。
- ❖ ツォンカパは道次第の利点について次のように述べている。
 - ❖ 仏説の全てを、取捨選択することなく全て道の階梯の中に位置付けることができる。
 - ❖ それぞれの仏説の真意を、その諸段階に対応して、適切に容易に理解できる。
- ❖ ツォンカパ独自の解釈（と思われる点）
 - ❖ 道次第は、一人の修行者が辿る道筋を示す階梯ではない。
 - ❖ 菩提心を起こした大士（大乘の菩薩）が、一切衆生を全て捨てることなく教え導くための全仏説の体系化である。

『菩提道次第大論』のあとがき

- ❖ 「あとがき」に『菩提道次第大論』執筆の素材を次のように述べている。
 - ❖ 道次第の伝承：
 - ❖ ナムカ・ギェルツェンに聴聞（ゴンパワからの伝承とチェンガワからの伝承）
 - ❖ チュキャブ・サンポに聴聞（ポトワ、シャラワからの伝承とポトワ、トルパからの伝承）
 - ❖ アティシャ著『菩提道灯論』からは三士の定義のみ
 - ❖ ドルンパの教説次第の構造を基礎にする
 - ❖ 多くの道次第の要点を集めて道の要素を完備し、実践しやすく、混乱のない順序で提示

カダム派の伝承

- ❖ 1394年（38歳）：夏、ロダクでナムカ・ギェルツェンから道次第を伝承
- ❖ 1395年（39歳）：ニェルにもどり、ドルンパの『教説次第大論』を初めて拝読。教説次第の伝承は既に途絶えていて、ツォンカパは聴聞ではなく、著作を読むことで、仏の教説一切とその実践の仕方について誤りのない確信を得る。さらに全ての所化それぞれの能力に応じて導くことができる道次第について確信を得た。同年、チュキャブ・サンポからカダム派の一切法を聴聞。
- ❖ 1396年（40歳）：秋にウルカのオデゲンギェルに行き、そこで1年滞在する。（その間にブッダパーリタの夢を見る。）

レンダワとの訣別

- ❖ 1400年（44歳）：夏安居にレンダワを迎え、冬にラデン寺で顕教と密教の道の重要な点について多くの議論をする。
- ❖ 1401年（45歳）：
 - ❖ 夏安居までレンダワと共に過ごし、その後レンダワはツァンに戻る。これ以降、伝記の中でレンダワとの接触は触れられていない。→この2年の間の議論で、レンダワとツォンカパは見解の一致を見なかったのではないかと推測される。
 - ❖ ラデン寺の首をかしげたアティシャの仏画の前で、アティシャおよびその弟子たちのヴィジョンを見る。
 - ❖ ラデン寺の麓のタクセンゲの隠棲所で『菩提道次第大論』を執筆する。

13

アティシャのヴィジョン

- ❖ アティシャ、その弟子ドムトゥン、その弟子ポトワ、その弟子シャラワなどのヴィジョンが一月の間現れ、それぞれがツォンカパに教えを授けた。最後にドムトゥンらがアティシャに溶け込んで行った。そしてアティシャがツォンカパの頭に上に手を置いて、「一切衆生のために悟りを目指すためのパートナーになろう。」とおっしゃって消えていった。
- ❖ これはツォンカパが道次第について確定的な思想を獲得したことの象徴的な出来事と考えられる。
 - ❖ ヴィジョン自体は、カダム派の道次第の伝承が全てツォンカパに伝えられたことを示している。
 - ❖ レンダワ宛て書簡に述べられた聖文殊の道の三要素の説と、ドルンパの『教説次第大論』がどのように統合されたかは示されていない。

14

ラマ・ウマパ宛ての書簡

- ❖ 聖文殊の教えである「道の三要素」、すなわち輪廻から出離したいという心と一切衆生を救うために仏道を実践しようという菩提心と空と縁起に関する正しい見解の教えが、顕教と密教の道の共通の実践方法およびそれぞれに固有の実践方法と同一のものであること、また「道の三要素」は種子のようなものであり、道次第は〔それを〕詳しく注釈したものであること、そして「道の三要素」が道次第の全てにおいて成立していること、また「道の三要素」の教えを説いたならば、増益や損滅の大きな原因になり、利益は少なく過失が大きくなると理解し、道次第を著すこと以外に「道の三要素」を別に教えることはしません。
- ❖ ここで聖文殊の教えである「道の三要素」とカダム派の道次第が一体のものであることが説かれ、また誤解の危険があるので「道の三要素」は説かず、道次第を著作することを述べている。

15

『教説次第大論』との関係

- ❖ ツォンカパは『教説次第大論』を読んだとき、そこに提示されている道の諸段階が、自分が考えていた道次第とほぼ一致することに感銘を受けた。
- ❖ 実際、『菩提道次第大論』の構成は、若干の異同を除いて『教説次第大論』とほぼ一致する。そのことが「あとがき」に、『教説次第大論』の構造を取り入れたと書かれている。
- ❖ 一方、カダム派の道次第の教えについては、その諸段階の中の個々の要素として様々な教えを取り入れているとも書かれている。
- ❖ 実際、『菩提道次第大論』の中には、祖師たちの言葉が多数引用されている。
- ❖ これらが渾然一体となって『菩提道次第大論』の内容が出来上がっていること、そのことについての確信が、アティシャやその弟子たちのヴィジョンに象徴的に示されていると考えられる。

16

密教の道の諸段階

- ❖ 密教は、顕教で理解した空（中観思想の核心）を、自らの身体において、今生で実現するための実践方法であり、根本的な思想は顕教と共通である。
- ❖ 大きく三つの段階がある。
 - ❖ 灌頂：入門儀礼。導師ラマの前で密教修行に取り組むことを誓い、本尊と一体となった導師によって許可を受ける儀式。
 - ❖ 生起次第：曼荼羅の世界を観想の上で生起させ、全宇宙が仏の曼荼羅であり、自らも仏であると観想する瞑想修行。
 - ❖ 究竟次第：自らの身体と心を実際に仏に変容させるための精神＝身体技法。生命エネルギーである風（ふう、ルン）を操作して、死の過程を引き起こし、その中で空性を理解する智慧と衆生を済度する幻身とを獲得する。さらに五つの段階（五次第）に別れている。

17

ツォンカパの密教思想の完成

- ❖ ツォンカパの密教思想を総合的に解説したものは『菩提道次第大論』に引き続いて1405年（49歳）頃書かれた『真言道次第大論』である。これは密教経典を道次第として体系的に位置付ける内容であった。伝記によれば、それは全て聖文殊の言葉の通りに書いたものとされる。
- ❖ しかし、ゲルク派の伝統の中ではツォンカパの密教の主著は、チャンドラキールティ作の『秘密集会タントラ根本タントラ広註・灯作明』に対する複註（1414年、58歳）と、『五次第を明らかにする灯明』（1411年、55歳）とされる。
- ❖ このツォンカパの密教思想の完成を象徴するヴィジョンが、ツォンカパの直弟子ケドゥプジェ著『秘密の伝記』に詳細に示されている。

18

ナーローの六法についての夢

- ❖ 1409年（53歳）12月3日：かつてアティシャの前で文殊と弥勒が議論したときに傍らにあった川の水で満たされた壺を、文殊金剛がツォンカパに授けようとした。
- ❖ 12月4日：プトウンの姿をしたラマが、『秘密集会タントラ』根本タントラの経帙をツォンカパに授け、「これを自分のものにしたい」と言った。前日の予兆の意味が大雑把に分かった。
- ❖ 12月5日：マルパのナーローの六法の核心についての理解を得た。
- ❖ 12月6日：ナーローの六法について、それが『秘密集会タントラ』と聖者父子の意図に基づいた教えであるとの確信を抱くに至った。
- ❖ 12月7日：覚醒状態と夢の状態とそれらの混合についての非常に強い確信を得た。これはチャクラサンヴァラ尊の法がチベットにおいて衰滅しそうになったのをツォンカパが明らかにしたことになる。

19

ツォンカパの密教思想の由来

- ❖ 若い頃は、『時輪タントラ』の講義を聴く。
- ❖ レンダワから『秘密集会タントラ』の五次第の講義を聴く。
- ❖ 1392年（36歳）：キュンボレーパからプトウンに伝わった教えを全て授かる。プトウン（1290～1364）は、一切智者と称され、
- ❖ 1401年（45歳）：ディグン法王からカギユ派のナーローの六法とマハムドラーの法などを聴聞する。
- ❖ ナーローの六法は、インドの密教行者ティーローパ（988-1069）からナーローパ（1016-1100）に伝わり、それをマルパがチベットに伝えた密教の六つの修行法。（1）チャンダーリーの火、（2）幻身、（3）夢、（4）中有、（5）光明、（6）来世への意識の移転（ポワ）と他者の身体への意識の移転（トンジュク）

20

夢の意味

- ❖ 最初、プトゥンから伝わった『秘密集会タントラ』の根本タントラの意味を理解する。
- ❖ 後半では、ナーローの六法についての深い意味について強い確信を得る。
- ❖ そしてそれが、『秘密集会タントラ』とその聖者流の解釈と一致した教えであることについての確信を得る。聖者流とは、聖者父子ナーガールジュナとアーリヤデーヴァおよびチャンドラキールティによる『秘密集会タントラ』の解釈を意味する。
- ❖ ここでインドの密教行者ナーローからマルパに伝わったカギュー派の教えと、聖文殊とプトゥンに由来する『秘密集会タントラ』の教えが一致していることを洞察することによって、1410年から1414年にかけて、ツォンカパの密教を代表する著作を生み出すことができたことが示されている。

21

まとめ

- ❖ ツォンカパの中観思想、道次第思想、密教思想が形成されていく過程は、かなりの程度まで分かる。
- ❖ 全て最後に関連するヴィジョン・夢が現れることが共通している。
- ❖ 中観思想について専ら聖文殊の教えが取り入れられ、道次第については、聖文殊の教えと伝統的な道次第の伝承とが一致するとの理解に到達し、密教については、聖文殊の教えは初期の『真言道次第大論』に活かされる留まり、最終的な理解は、プトゥンの伝統とカギュー派のナーローの六法が深いところで一致していることの確信によって得られる。
- ❖ 密教については、実際の著作の中での確認作業が着手されていない。今後の密教研究者の研究を期待したい。

22

参考文献

- ❖ 石濱裕美子・福田洋一『聖ツォンカパ伝』大東出版社、2008年
- ❖ 福田洋一『ツォンカパ中観思想の研究』大東出版社、2018年
- ❖ 福田洋一・拉毛卓瑪「ツォンカパ伝における年次と四季の確定」『佛教學セミナー』第109号、2019年、1-38頁
- ❖ 更藏切主『「菩提道次第大論」におけるカダム派思想の研究—道次第を中心として—』博士論文、大谷大学、2020年

23